

NIM 「臨床治療学—ペイシェント マネージメント」

東京大学教授 高 久 史 磨
東京大学教授 尾 形 悦 郎
東京大学教授 出 月 康 夫
筑波大学教授 柏 木 平八郎

編

九州大学教授

仁 保 喜 之

最近各大学医学部では、カリキュラムが理論ばかりでなく具体的な治療学をも教えるように変わりつつある。しかし現時点ではこれを総体的、かつ具体的に論じた良いテキストが少ない。

このほど医学書院から New Integrated Medical Lectures シリーズの1つとして、「臨床治療学—ペイシェントマネージメント」が出版された。これは、治療学の教科書として1つのあるべき方向を示したという点で注目される。1979年に上梓された同じNIMシリーズの「治療総論」に比してずっと具体的な項目が多いので、より“各論”的役割を果たすであろうと考えられる。特に、救急蘇生法、中心静脈栄養、死の医学などの項目が新たに加わっている。

高久史磨教授(東京大学・内科)、尾形悦郎教授(東京大学・内科)、柏

木平八郎教授(筑波大学・内科)、出月康夫教授(東京大学・外科)の4人の方々の“臨床的かつ実用的な内容にする”という編集方針に沿って、全国の各科25人の方々が具体的な手技や治療法を要領よく述べておられる。

図や表が豊富なため、見やすく読みやすい。Lecture 5「救急の手技」の心肺脳蘇生法を例にとると、15個の図と6個の表を用いてあり、理解を助けている。書物の厚さも適当であるのでベッドサイドの学生や研修医が日常持ち運ぶにも便利であろう。

書き方も、従来のありきたりの教科書とは一味違っていて目を引く。例えばLecture 9「ベッドサイドの主な問題とその解決法」の中の171頁にショックに関して、冒頭に次のような記述がある。“ショックは墜落の危険に晒された飛行機に譬える

ことができる。医者はその飛行機を操縦するパイロットにあたり、その危機を脱するまではその場を離れてはならない”とあり、読者に訴える力がある。

また、Lecture 21の「死の医学」の中の死の告知なども、家族への配慮から死亡診断書の書き方に至るまでの具体的な説明があり、若い医師達にとってはありがたい項目であろう。若い医師と言え、第2頁目に「医師の立場」という項目で次のようにさしている。

“車が故障し修理屋へ持って行ったとき、説明してくれる人が非常に若かったり、事務系の人であつたら不信を抱くだろう。あなたはたとえ医師だとしても経験が一步浅く、人生経験が患者さんより少ないことを自認しなければならない。”若い医師達がよくかみしめて、味わってほしい文章である。

医学部高学年学生、卒業初期の研修医を対象とした治療のガイドブックであるが、治療手技や治療内容が新しいので、高年齢の開業の先生方や勤務医の方々にも一読をお奨めしたい。上記の蘇生法のほかにもプライマリーケアとして重要なことが図解入りでわかりやすく提示してあるので、とっさの役に立つことも多いと思われる。多くの医師の座右の書として利用されることを望みたい。

B5判 318頁 図87 写真2 1989
¥4,300 円 300 医学書院 刊